

雷雲蒔絵鼓胴

長二七・五 口徑一二・五

永享二年（一四三〇）

兵庫 個人蔵

鼓は太鼓系の楽器の総称であった。また胴のくびれた太鼓だけを称したともいう。推古天皇二十年（六一二）百済の味摩之が帰化した際に伝えた腰野鼓こしのつづみを最古とし、沓鼓、二ノ鼓、三ノ鼓、四ノ鼓の別があつたという。沓鼓は舞樂に、三ノ鼓は高麗樂に用いられ、二ノ鼓、四ノ鼓はいつの間にか亡逸したという。これらは主として桴ばちで左右の両革部を打ち鳴らすものであつたが、平安末期に片面だけを手で鳴らすようになり、この手で打つ鼓の小さいものを小鼓、大きいものを大鼓と呼ぶようになったという。初め白拍子などによつて用いられ、能樂の囃子に使われ、江戸時代には長唄囃子などの主要楽器となつたという。

この鼓（鼓）胴注2の古い遺品としては東大寺、あるいは法隆寺献納宝物のうちに奈良時代のそれがあり、東大寺には寛喜四年（一二三二）、唐招提寺、教王護国寺には鎌倉時代の法会用具のうちにこれらの遺品がある。これらはいずれも木胎に黒漆を塗り、極彩色を用いて文様を施したものである。また、法隆寺献納宝物中に黒漆塗のみで延文二年（一三五七）の銘をもつ鼓胴があるがこれについては後述する。

以上掲げた遺例はいずれも古様で近世初頭からその例をみる蒔絵

装飾の鼓胴とはおよそ趣を異にする。その関連性さえ結びつけられないのが現研究状況ではなからうか。

筆者はここに興味ある鼓胴の遺例を掲げて蒔絵史の立場から、この鼓胴の歴史的な位置づけを試みてみたい。

この大鼓胴は旧宝厳寺所蔵、雷雲蒔絵の大鼓胴（原色図版）である。

胴裡に次の朱漆銘が記され注目される。

「永享二年 六月廿一日 源左京大夫 持信 奉寄進 竹生嶋御寶前」

永享二年（一四三〇）六月廿一日、源左京大夫持信が竹生島宝厳寺に奉納した鼓であることが知られる。

ただし、この大鼓胴については新発見というべきものではない。すでに大正十二年刊『工藝美術聚英』注3第一年第九輯の第八十六図に集録され、簡単な解説が付されている。しかし、筆者はより詳細な研究が必要であろうと思慮しここに一文を掲げるものである。因に、この解説にある如く、現在でも二通の織田信長関係文書が添えられている。

さらに記せば春慶塗の桐箱蓋表には次の墨書銘が書かれている。

「信長公上覽、蒔絵鼓胴、初音、竹生島、寶厳寺蔵、この外箱の製作時期（江戸時代前期か）この鼓は銘を「初音」と称せられていたことがわかる。

さて、この鼓胴を検討するにつき、まずはその形状、次にその蒔絵、最後にその伝来という順序で進めてみたい。

形状

形状は(挿図1)に示した(長さ二七・五口径一二・五)が、近世の鼓胴(挿図2)と比較するとかなり特異である。

筆者が知る限り、鼓胴の現存例は前述の鎌倉時代以前(その以後製作になっても形式的には変化がないのでこう記す)の古制のものから近世の遺品までの間空白の時期があり、その間をうめる資料が存在せず、その形式の変化の過程が理解出来ない。中世以前の極彩色装飾の鼓胴と近世の蒔絵装飾の鼓胴との関連を示す遺品がないのである。

その意味で本鼓胴は非常に興味ある資料と推察される。

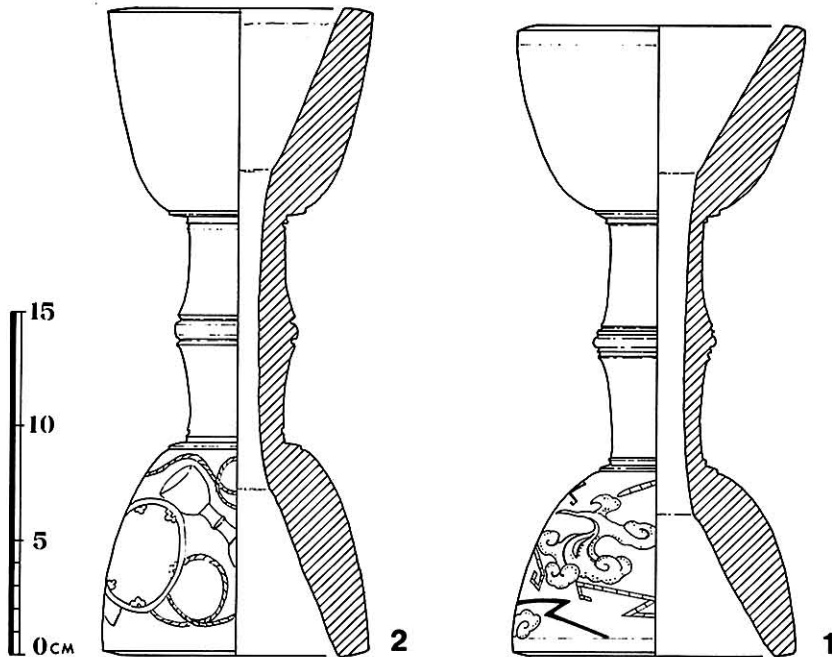
まず、蒔絵装飾の鼓胴の遺品が現われるのは桃山時代とされている。^{注4} 現存する最古の紀年銘のある資料は

柘蒔絵大鼓胴「永禄九^{丙寅}年二月廿二日」銘 東京国立博物館蔵

であろう。^{注5} この蒔絵はいわゆる高台寺蒔絵で金平蒔絵を主体としたものである。この高台寺蒔絵で意匠された大鼓胴・小鼓胴の現存する例は数少くない。そして、ある一定の形状を持っている。

大鼓胴の基準を示すと、長さ九寸四分(二八・六糎)、口径三寸八分(一一・五糎)前後の数値を保っている。柘蒔絵大鼓胴も図版で比較資料に掲げた鼓蒔絵大鼓胴(当館寄託 滋賀 個人蔵)もほとんどこの形状である。

この近世蒔絵の大鼓胴と比べると本品は非常に乳袋(両端の彎曲部)が開いた形状でまた乳袋が短く巢間部(中央の握部)が長い構造をもつことがわかる(挿図参照)。同じ蒔絵装飾ではありながら形



(八賀晋 作図)

1. 雷雲蒔絵大鼓胴 旧宝蔵寺蔵 永享二年銘
2. 鼓蒔絵大鼓胴 滋賀 個人蔵 桃山時代

状にはかなりの差異が生じている。やはり永享二年と近世初頭との年代の差であろう。蒔絵についても後述の如くその技法は異にするものが多い。

本鼓胴の形状を見る時、これら近世の鼓胴と鎌倉時代以前の鼓胴との中間に位置する遺品ではなからうと推察するのである。一例をひいてみる。前述の法隆寺献納宝物中の延文二年（一三五七）銘をもつ鼓胴（図3）をである。年代的に比較的近いという理由によるものである。これは黒漆塗のみで他の装飾はない。長さは三九・九糎、口径一八・九糎と本品に比べかなり大振りである。銘文によれば、法隆寺の聖霊会用の三鼓で、葉師寺伝来の古胴を写したものであるという。^{注6}そのため延文二年の銘をもつものの古制に則って製作されたことがわかるものである。では、本鼓胴の形状はこの三鼓の形状に似るところが見られないであろうか。すくなくとも乳袋部、巢間部など近世の大鼓胴よりも類似点が多い。鼓胴の形状の変遷史を考えるならば当然、本鼓胴はその中間に位置されなければならぬものであろう。

とは書くもののこのような鎌倉時代以前の聖霊会というような仏事の法会に用いられる楽器とは形式的に異なる楽器と考えたほうが妥当かとも思われる。意匠、装飾技法の違いというものはそれを主張しているのかもしれない。例えば、室町時代盛んになる猿楽座の楽器、猿楽の能の楽器というようにものに比されないであろうか。また、寄進された霊島・竹生島という歴史的・地域的背景も考慮されなければならぬ。

蒔絵

蒔絵は乳袋から巢間にかけて外面総体に施こされている。

意匠は全体に渦巻き、飛翔する雷雲を配し、その間に電光する稲妻を表わしている。いかにも荒々しく、大胆なデザインである。雲は飛雲・瑞雲の系統をひき、稲妻は「北野天神縁起」絵巻などにみる雷文の流をくむものであろう。我が国の伝統的意匠といえる。

技法は下地堅めの布着はないが、かなり厚手の地にし、上塗は黒漆を施こしている。総体に地蒔は荒い不定形の金粉を厚梨地にして蒔く。但し革口（口縁部）は黒漆のみにとどめている。

雷雲部は薄肉の高蒔絵と平蒔絵部とに分け金蒔絵を施こしている。高蒔絵は漆盛上である。雷雲の境線は描割の技法で表わし、部分的に金あるいは銀の細かな方形切金で処々の変化をつけている。

雷光部はその一閃くを黒漆盛上に金蒔絵のものと、螺鈿でこれを表わすものに分けている。高蒔絵部は雲部と同様微粒な金粉を蒔く。螺鈿部はほとんどが一糎弱のみじかく細い厚貝片を連続して象嵌したもので、屈折部は一片を斜に切断して表わしている。ただ、この螺鈿については『美術工藝聚英』の図版でみるかぎり、かなりの欠損部が目立ち、その解説にもある通り、相当部が後補であろうと推測される。さらにこの解説によれば「稲妻の部分には金鈿を嵌せしも今は多く脱失して其痕を存するのみ」とあるので、あるいは当初は螺鈿ではなく金貝であったことも予測される。

蒔絵全体からの印象は意匠的にも技法的にも大胆で大づかみなのが感受出来る。手擦による損傷、銀切金の焼け、螺鈿の後補など

を考慮しても、当初の蒔絵自体、鼓胴という特種な器体の蒔絵として、豪快な気分でなされたように推察する。

これらの蒔絵意匠、技法（螺鈿あるいは金貝にしても）は銘文を基準とした十四世紀後半から十五世紀前半の蒔絵と見て妥当であろう。

伝来(一)

伝来については、まず鼓胴の「受け」「海」と呼ばれる乳袋裡に記された朱漆銘の検討から始める必要がある。銘文は前記しているが次の通りである。「永享二年 六月廿一日 源左京大夫 持信 奉寄進 竹生嶋 御寶前」の七行、二十五文字である。豎木にあざやかな朱漆で書かれている（図1・2）。

さて、ここでまず取りあげられるべきは、寄進者である源左京大夫持信なる人物であろう。この持信は『尊卑分脈』^{注7}によれば、清和源氏義家流 一色公深の五代孫、一色持信がその人に当るように思われる。一色氏は足利氏の一族で室町時代四職の一であった。公深の子範氏は一色太郎入道道獻と称し、九州探題を務めた人物で、其の曾孫修理大夫満範（応永十六年卒）が持信の父にあたる。また持信の兄、義貫（義範）は足利義満、義教につかえて若狭守護となり、大覚寺義昭を大和に討った後、義教の嫌疑をうけ、永享十二年五月自害した人物である。

持信自身の履歴はあまり知られてはいないが、『尊卑分脈』の注書には「兵了少甫、新統古作者」とあり、また『永享以来御番帳』^{注8}には兄一色修理太夫義貫は御相伴衆、持信は御供衆、一番衆に一色左

京大夫持信と記されている。室町幕府六代將軍義教の側近であったことに間違いはない。また、この『御番帳』の記載には次項が永享三年正月になっていることから、すくなくとも奉納時前後の時点では源左京大夫持信を名のつてもおかしくない人物である。さらに『分脈』の注書「新統古作者」を手掛りとして『新統古合和歌集』^{注9}を引くと巻第四、秋歌上（四三五）に「源持信」の名が見られる。歌は、

「左大臣の家にて三首の歌詠ませ侍りける時、野外虫を

秋深き小野の浅茅の霧ながら未葉にあまるむしの聲」

である。当時一流の歌人であったことも知られる。

また『寛政重修諸家譜』^{注10}によれば、「一色持範」の項に「次郎 式部少輔、或は兵部少輔右京大夫持信に作る。一色右馬頭満範が二男。

勝定院義持より諱の字をあたへられ、永享四年九月普廣院義教、駿河國主今川範政がもとにいたり、富士山を詠ぜしとき、持範等も扈從し、をのゝ和歌を詠ず。」と記述されているので因に記しておく。

いずれにしろ、この雷雲蒔絵の鼓を竹生嶋御宝前に寄進した人は、一色義貫の弟で、將軍側近の臣であり、歌人であった「一色左京大夫源持信」なる人物であったことは証されよう。

この持信と竹生島との関係、鼓寄進の背景というような事は今後の研究が待たれるところである。

伝来 (二)

^{注11}この鼓胴には織田信長の書状と朱印状が以前より付属されている。（図4・5）

これらは信長とこの鼓胴との関係を物語るもので、一層の歴史的な興味を感じさせるものがある。

青葉之笛持せ被越候 名物二候 前々誰之所持候て、何とある子細に依て竹生嶋へ寄進候哉 小笛添候 是も定子細可有之候 能々相尋候て、存知之躰を具書付候て、可被越候、恐々謹言

九月六日

信長（花押）

磯野丹波守殿

青葉之笛到来候 寔名物見事候 今少留置 遂一覽之、可令返進候、此笛当山へ寄附候子細之隨身候つる哉、小笛相添候、此由来等（解・を） 随二存知之□□書付□□候、次静か所持候□□小鼓筒之蒔絵ハ雷（由・之）にて候由候、可披見候 猶磯野可申候 恐々謹言

九月六日

信長（朱印）

竹生嶋惣山中

一通は磯野員昌宛書状で内容は、竹生島の名物青葉の笛を見た。誰がどのような理由で竹生島に寄進したのか、また、これに添えられる小笛も由来がありそうである、これらの事を具に調査して知らせるように、というものである。

もう一通は竹生嶋山中宛の朱印状で内容は、青葉の笛は到来した。まことに見事な名物である。暫く手下において見たのち返す。この笛を当山へ寄進したのは誰でその子細はどのようなことか、これに添う小笛の由来についても知りたい。また、静所持という小鼓の胴は雷の蒔絵と聞く。ぜひ見たいものである。磯野に申しておくので

よろしくたのむ。というものである。

いずれも九月六日で内容から推しても同時に書いたものである。

これら二通の文書はいずれもその写しが竹生島にあり『竹生島文書』^{注12}として『織田信長文書の研究』にも収録されている。^{注13}これらの研究によればこの日付は天正元年（一五七三）九月六日であろうことがほぼ判明している。信長四十歳、浅井、朝倉氏を滅亡させた直後である。宛名の磯野員昌（丹波守）は浅井長政の臣で近江佐和山城主、前々年（元龜元年二月）信長に降り、近江新庄城主。天正六年二月信長に違背し、高野山に出奔して所領没収されるという人物である。^{注14}いかにも戦国時代のめまぐるしい、はげしい歴史を感じさせる人物であるが、この書状はいかにも古美術品を愛でた信長らしい心あたたまる内容である。青葉の笛は高倉天皇秘蔵の笛か平敦盛の遺品であったものであろう。またこれに添った小笛も由緒正しいものであったであろう。

ただ、ここで問題にすべきは「竹生嶋惣山中」宛の「静か所持候□□小鼓筒之蒔絵ハ雷にて候由候、可披見候」の部分である。小鼓筒とはあるがあきらかにこの雷雲蒔絵鼓胴をさしているものである。当時は静御前所持と喧伝されていたのである。後刻この鼓胴を信長はどう見たであろうか。その時にはすでに現在の如く「永享二年、源左京大夫持信 寄進」の銘はあつたはずである。信長は激怒したのであろうか、あるいは持信という人物は静御前の遺愛の鼓を寄進した心ゆかしい人であったとみたであろうか。今箱書には「信長公上覽 蒔絵鼓胴 初音」とのみ記されている。

以上、竹生島宝蔵寺旧蔵の雷雲蒔絵大鼓胴について個々の方面から検討を試みてみた。銘文の通り、永享二年六月廿一日、源左京大

夫持信が竹生島に寄進した鼓胴であることに間違いはなからう。その観点からすれば時絵の基準作例となる。時絵の歴史的流れを研究するとき、その製作年代の確たる遺品は意外と数少ない。その意味においてこの大鼓胴を取りあげ検討してみた次第である。

しかし、楽器としての形式その位置づけとなると何とも頼り無い限りである。識者のご助言を期待してやまない。
(灰野昭郎)

〈注〉

1 『世界大百科辞典』(平凡社)

2 鼓胴・鼓筒・鼓胴・鼓筒などの名称があるが本文では鼓胴に統一した。

3 『時絵鼓胴 南北朝時代』 滋賀県 寶蔵寺蔵

この鼓胴も亦、永享年間源持信によりて竹生島辨財天へ奉獻せられしものにして『初音』と銘せられたり、現今胴のみを伝へて皮を逸失す、別に織田信長の書翰二通之に副ふ、今其内の一通を掲げたり、文中静御所持云々の條項あるを見る當時已に名物として喧傳鑑賞せられし證左とすべし、地全體に荒粉の砂子を撒布し、其上に雲形を高時繪を以て描き出し所々截金を用ひ其他稻妻の部分には金鈕を嵌せしも今は多く脱失して其痕を存するのみ、胴裡に朱添を以て左の記文を書す製作年代恐らく南北朝時代を下らざるものなるべく、此種鼓胴中年代を知るべき標準に資すべきものなり、蓋し胴の中央に竹節の如き線あるは大鼓にのみ存するものにして小鼓には見ることなし。圓径四寸二分長サ九寸

永享二年六月廿一日

源 左京大夫持信

奉寄進

竹生島御寶前

4 荒川浩和「不滅の余韻―時絵の鼓胴」

5 文化庁鈴木則夫技官のご教示によれば京都府下宇良神社に「永禄十一年銘・春慶塗小鼓胴」と「慶長五年銘・春慶塗大鼓胴」が蔵せられて

いるという。

6 器裡墨書銘

墨師写

「法隆寺 聖靈会所 三鼓也」

願主一臈 少僧都美禰 權律師慶祐

作者

願盛宗禪房 目安住

「当寺古三鼓雖在之不鳴之間每度大会之時自他併借用非無劬勞之処今度時対令然而出来之条件冥助之至感 喜悦々々 但寺用之外輒不可出干他所有者也」

延文二年 西丁六月注之

以慶玄法印舍利供養新足未進張之訖」

7 『新訂国史大系』第六十卷上(吉川弘文館)

8 『群書類從』十八輯(經濟雜誌社・明治三十七年刊)

9 『国華大觀』「新統古今和歌集」(教文社・大正十一年刊)

10 『寛政重修諸家譜』第一輯(国民図書株式会社・大正十一年刊)

11 『工藝美術聚英』第八十六圖解説(大正十二年刊)

12 『竹生島文書』二〇近江

13 奥野高広『織田信長文書の研究』上卷(三九八・三九九)(吉川弘文館)

14 『戦国人名辞典』(吉川弘文館)

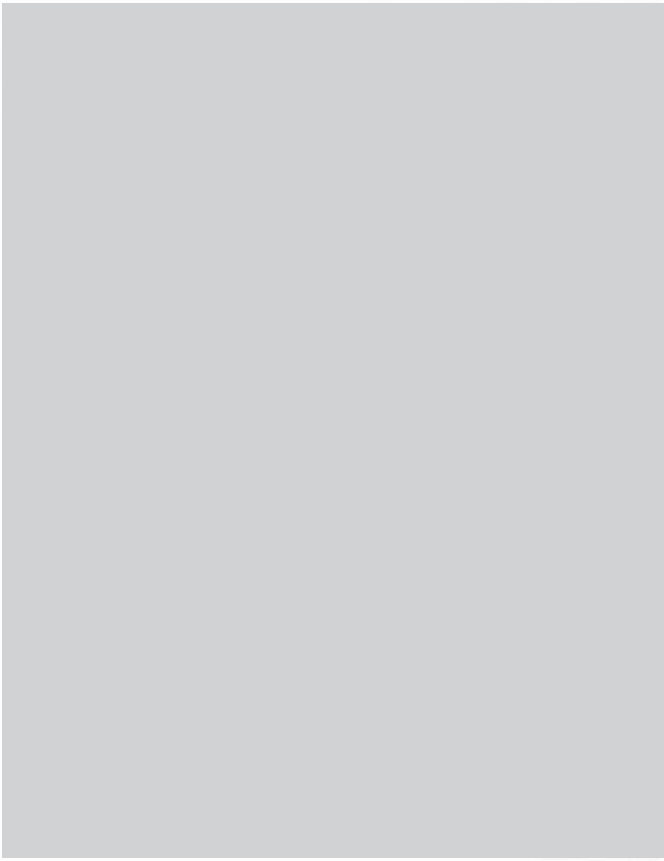


図1 乳袋裡朱漆銘

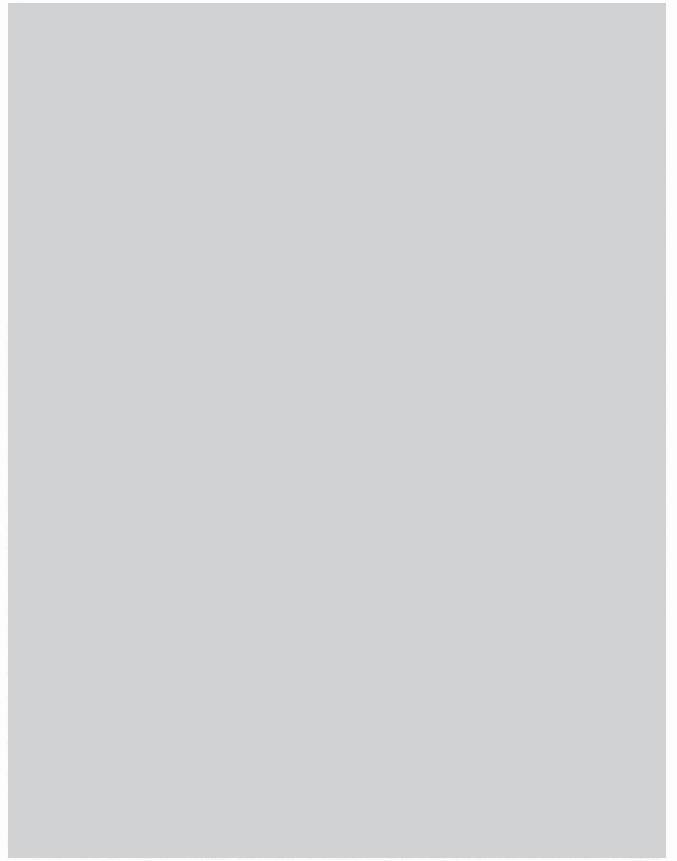


図2 乳袋裡朱漆銘

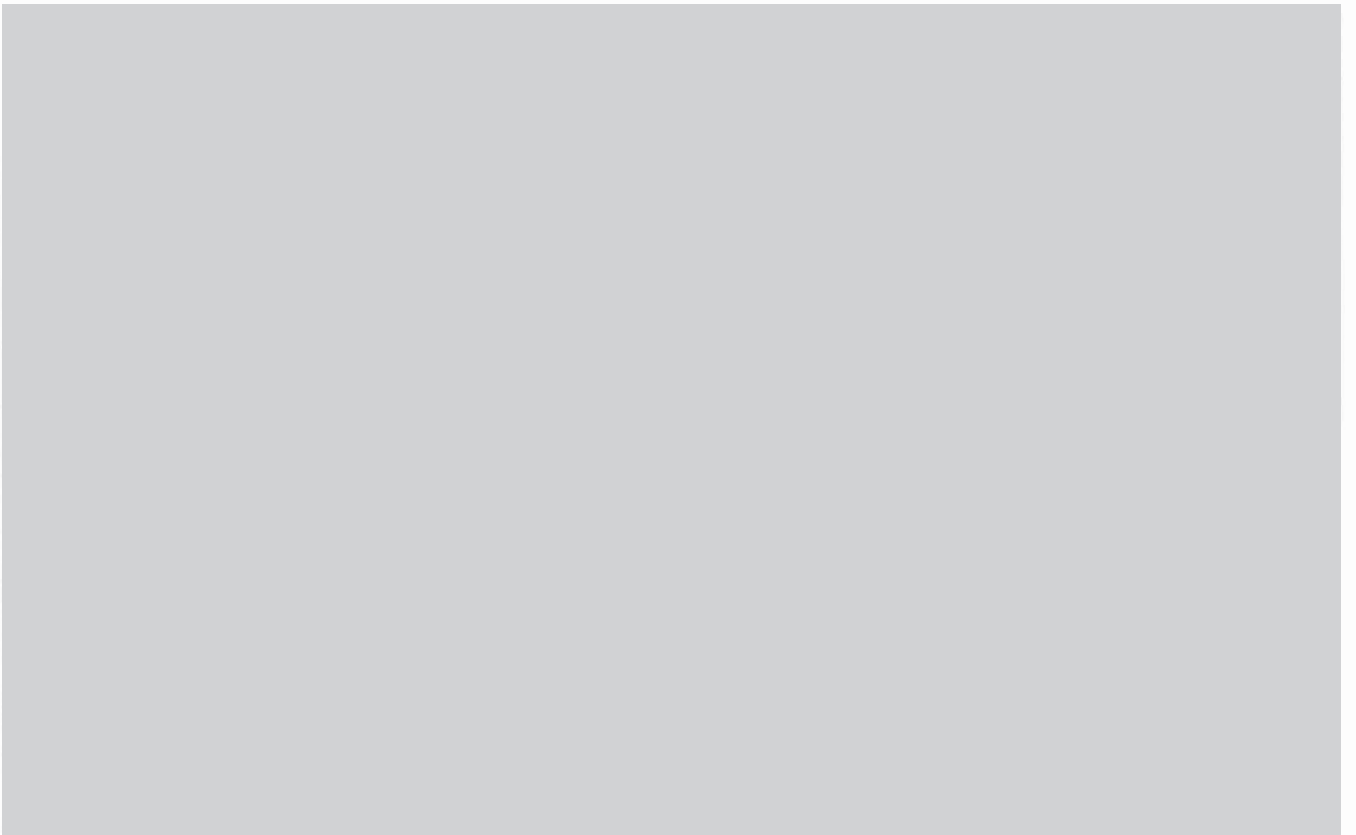


図3 黒漆鼓胴(法隆寺献納宝物・重要文化財) 東京国立博物館蔵

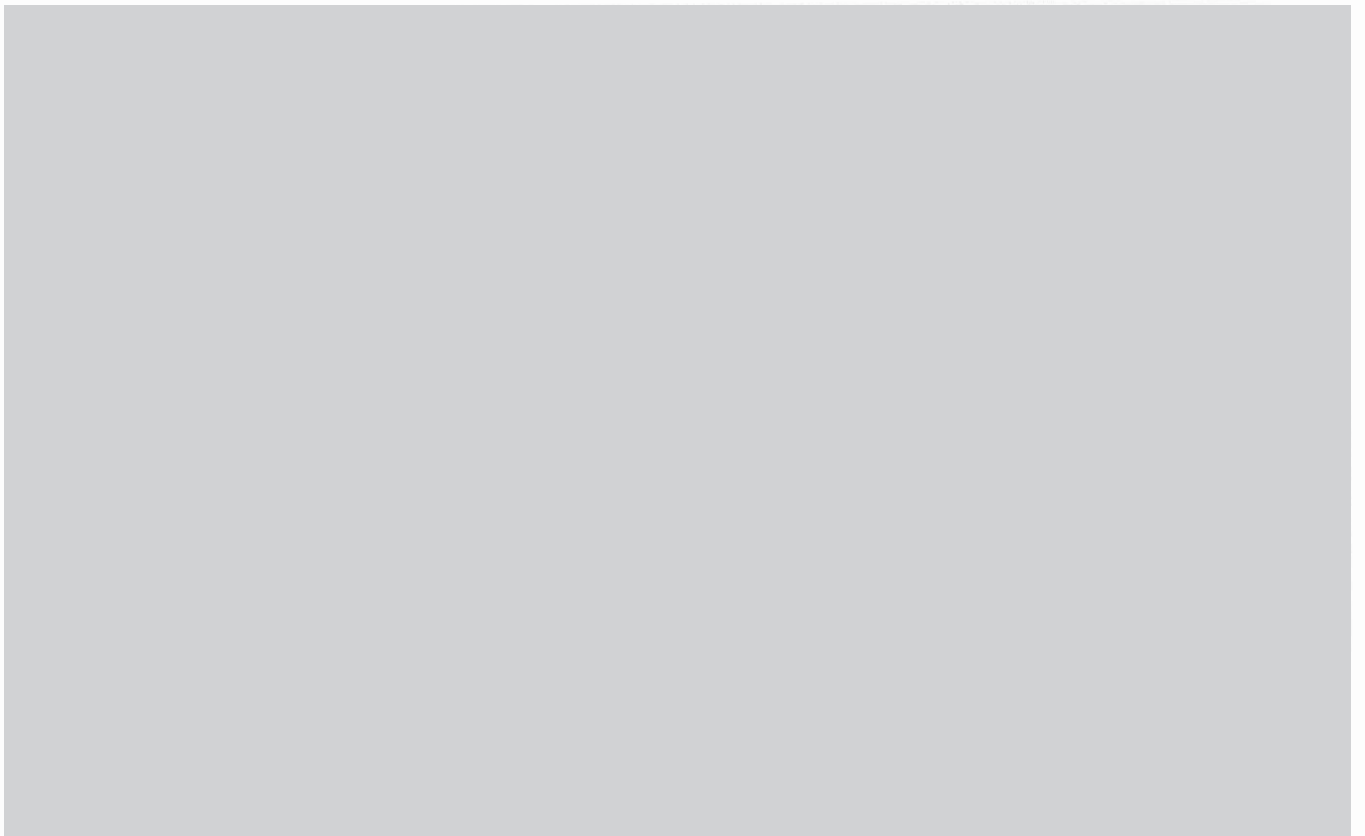


図4 織田信長書状 磯野員昌宛

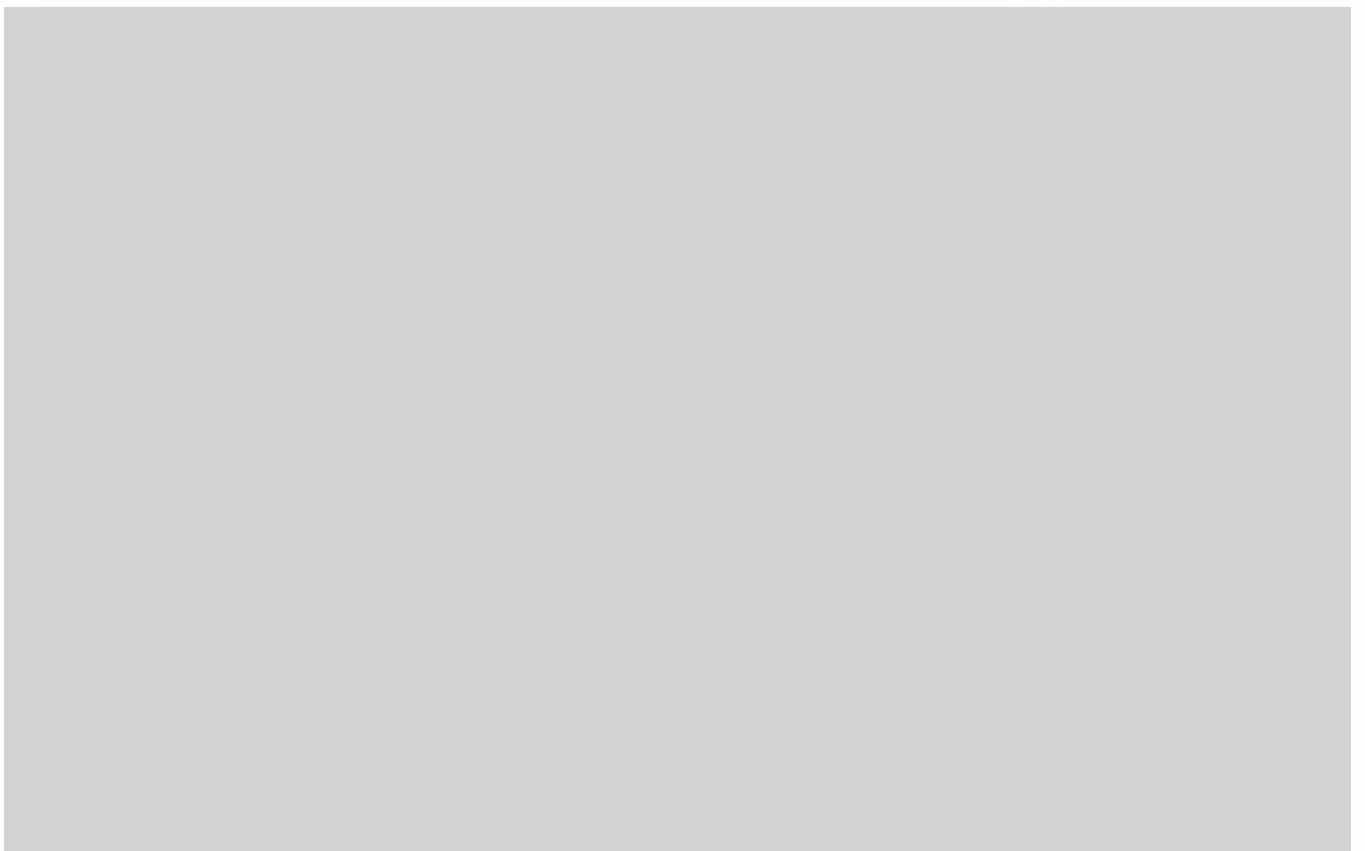


図5 織田信長朱印状 竹生島惣山中宛